

心理的距離と感情価の潜在的連合

高沢 佳司

愛知学泉短期大学

The Implicit Association Between Psychological Distance and Emotional Valence

Keiji Takasawa

キーワード：心理的距離 psychological distance, 接近回避動機 approach and avoidance motivation, 解釈水準理論 construal level theory, 潜在連合テスト implicit association test, 紙筆版 IAT paper and pencil version of IAT

1. 問題と目的

一般的に、人間は快い刺激に対して接近動機が高まり不快な刺激に対して回避動機が高まる。各々の社会的状況に合わせて(e.g., 刺激の感情価を知覚して)、我々は接近もしくは回避行動を取る。接近回避行動を媒介する要因として、他にも自己と刺激との心理的距離が挙げられる。心理的距離とは、自己の直接経験から対象もしくは出来事への距離である(Bar-Anan, Liberman, Trope, & Algom, 2007)¹⁾。心理的距離は、空間的距離・時間的距離・社会的距離・仮想性距離を包含する概念である(e.g., Bar-Anan, et al., 2007; Bar-Anan, Liberman, & Trope, 2006; Stephan, Liberman, & Trope, 2010; Wakslak & Trope, 2008, 2009)¹⁻⁵⁾。我々が刺激に対して接近行動を取ると、心理的距離は近づく。一方、刺激に対して回避行動を取ると心理的距離は遠くなる。例えば、安全で美味しくしかも安価(快)なメニューを取り扱うレストランには多くの客が足を運ぶ(i.e., 空間的距離が近づく)であろう。空間的距離が近づけばそれぞれ、時間的距離の次元において「今、あのレストランに行こう」、社会的距離の次元において「あのレストランには親しみを感じる」、仮想性距離の次元において「あのレストランを選ぶことは現実的だ」と解釈される。一方、安全性に疑問が残りそれほど美味でもなくしかも高価(不快)なメニューを取り扱うレストランには、それほど多くの客が足を運ばない(i.e., 空間的距離が遠くなる)であろう。空間的距離が遠くなればそれぞれ、時間的距離の次元において「後で、あのレストランに行こう」、社会的距離の次元において「あのレストランは親しみを感じない」、仮想性距離の次元において「あのレストランを

選ぶことは非現実的だ」と解釈される。

先行研究からは感情価(快・不快)と接近回避動機との間に強力な連合が形成されているという知見が、呈示された刺激と接近回避行動との相互作用によって示されている。例えば、腕の屈曲と接近動機、伸長と回避動機が連合しているため、前者の行為中に呈示された刺激は相対的にポジティブ、後者の行為中に呈示された刺激は相対的にネガティブに評価される傾向が見出されている(Cacioppo, Priester, & Berntson, 1993)⁶⁾。同様に、レバーを手前に引く動作が接近動機、奥に押す動作が回避動機と連合しているため、呈示された刺激の感情価と接近回避動機が一致する場合(i.e., ポジティブな刺激と接近行動、ネガティブな刺激と回避行動)は素早く処理が遂行された(Chen & Bargh, 1999)⁷⁾。以上のように、接近回避行動と刺激の感情価との連合が示されており、同様の傾向は他の社会的文脈においても再現されている(e.g., Förster & Strack, 1997, 1998; Kawakami, Phillips, Steele, & Dovidio, 2007; Phillips, Kawakami, Tabi, Nadolny, & Inzlicht, 2011)⁸⁻¹¹⁾。

特に Kawakami et al. (2007)¹⁰⁾の研究において、特定の社会的対象への接近行動を訓練した群は、回避行動や統制行動を訓練した群と比べて実際にその対象へとより近く接近する(i.e., 空間的距離を縮める)ことが明らかになっている。接近行動がポジティブな感情価、回避行動がネガティブな感情価とそれぞれ結びついているとすれば、接近行動が刺激の感情価をポジティブに変化させる結果、刺激との心理的距離まで縮めると考えられる。一方、回避行動は刺激の感情価をネガティブに変化させる結果、刺激との心理的距離を拡大させると考えられる。つまり、ポジテ

ティブな感情価と心理的距離の近さ、ネガティブな感情価と心理的距離の遠さとの間にはそれぞれ連合が形成されていると予測される。本研究ではこれらの概念同士が連合を形成している現象を「距離・感情価一致効果」と呼称する。

距離・感情価一致効果が観測される理由は、心理的距離と刺激の感情価との間の連関関係が日常生活の中で過剰に学習された結果であろう。ポジティブな刺激には接近動機が働き、ネガティブな刺激には回避動機が働きやすいため、その接近回避行動へと随伴する心理的距離と、刺激への感情価との間にも連合が生じると考えられる。

解釈水準理論(レビューとして、Trope & Liberman, 2010)¹²⁾はこれまでのところ、心理的距離と表象の抽象度、またそれらの操作の結果として生じる予測・評価・行動を探求している。しかしながら、心理的距離や表象の抽象度の操作と、刺激と感情価の判断といった感情成分に関する変数との連関関係については、解釈水準理論によっては検討されていない。そこで本研究では心理的距離と刺激の感情価との連合を示し、心理的距離の4つの次元において距離・感情価一致効果を観測・再現することを目的とする。これによって解釈水準理論の適用範囲が拡大されることが期待されよう。

Bar-Anan et al. (2006)²⁾が指摘しているように、概念間の自動化された連合を測定する際には、顕在指標による検証では十分とはいえない。そこで本研究では潜在的態度を測定する課題の一つである Implicit Association Test (IAT)を用いて心理的距離と感情価との潜在的概念連合の強度を測定する。その効果量 D の理論的中央値はゼロである。距離・感情価一致効果を示す潜在的態度が正の値、距離・感情価一致効果とは逆の潜在的態度が負の値となるよう、「近いーポジティブ」、「遠いーネガティブ」を一致課題とし、「近いーネガティブ」、「遠いーポジティブ」を不一致課題とした。本研究では4つの実験を通じて、IAT効果量 D が理論的中央値であるゼロよりも高い値を示す、という仮説を検証する。

2. 実験方法および結果・考察

(1) 実験1 空間的距離

1) 実験参加者

大学生・大学院生 124名(うち女性 57名)、平均年齢は 20.33歳($SD = 2.29$)であった。

2) デザイン

Implicit Association Test (IAT)の効果量 D (Greenwald,

Nosek, & Banaji, 2003)¹³⁾を算出し、従属変数とした。ゼロよりも高い値は距離・感情価一致効果が高いことを示す。理論的中央値であるゼロとの1サンプル検定によって分析を行った。

3) 実験材料および刺激

Bar-Anan et al. (2006)²⁾で用いられた空間的距離を表す単語8語を用いた。近さを表す単語は「髪の毛・扉・椅子・靴」、遠さを表す単語は「飛行機・太陽・雲・北極」であった。次に五島・太田(2001)¹⁴⁾より感情価を表す単語8語を選出した。ポジティブな感情価を表す単語は「快晴・達成・幸運・元気」、ネガティブな感情価を表す単語は「自殺・空襲・殺人・差別」であった。なお刺激語の呈示順序はランダムであった。

実験の詳細について知らされていない予備調査参加者13名が、空間的距離を表す単語の感情価を「1. 非常にネガティブ」～「7. 非常にポジティブ」の7件法によって評定した。繰り返しのある t 検定の結果、空間的距離の単語は近い距離の4語($M = 4.44, SD = .61$)、遠い距離の4語($M = 4.69, SD = .78$)の間には感情価に差が見られなかった($t(12) = .88, p = .40, d = .36, 95\% CI [-.87, .37]$)。また、カテゴリ毎に語の長さの平均値を算出した。繰り返しのない一元配列分散分析の結果、4つのカテゴリ間における語の長さには差は見られなかった($F(3, 12) = .16, p = .92, \eta^2 = .04$)。ペアごとの平均差の95% CIは全てゼロを含み、下限 = $-1.65 \sim -1.15$ 、上限 = $1.15 \sim 1.65$ であった。

4) 装置

IATはInquisit 2.0 (Millisecond Software)によって実行した。ディスプレイは17インチのものを用いた。解像度は1280×1024であった。回答はパソコンのキーボードを介して行われた。参加者は約60cm離れて画面を注視し、左のカテゴリに分類する際はEのキー、右のカテゴリに分類する際にはIのキーを用いて回答を行った。

5) ブロック編成

IATのGreenwald et al. (2003)¹³⁾に従い7ブロックとした。ブロック1では感情価を表す単語の分類課題の20試行、ブロック2では空間的距離を表す単語の分類課題の20試行であった。ブロック3では「近いーポジティブ、遠いーネガティブ」の組み合わせ課題(i.e., 近い距離の単語とポジティブな単語を同じキー、遠い距離の単語とネガティブ

な単語を同じキーで反応)の練習課題を20試行、ブロック4はブロック3の組み合わせ課題を40試行を行った。ブロック5はラベル位置を逆にしたブロック2の課題の20試行であった。ブロック6、7はブロック3、4の課題を、空間的距離のラベル位置を逆にした課題(i.e.,遠い距離の単語とポジティブな単語と同じキー、近い距離の単語とネガティブな単語を同じキーで反応)から構成された。奇数番号の参加者は1~7ブロックの順で課題を行い、偶数番号の参加者は1、5、6、7、2、3、4の順で課題を行うことでカウンターバランスをとった。

6) 手続き

大学生に関しては、心理学系の授業で参加者を募集した。実験への参加は任意であること、授業評価点への加点となることが予め伝えられた。大学院生に対しても、実験への参加は任意であることが伝えられた。参加の報酬として少額の菓子が配布された。実験は実験室内で個別に行われた。参加者はIATへの回答、性別、年齢を問うフェイスシートの順で課題を行った。参加者の回答がすべて終わった後、実験者がデブリーフィングを行い、実験終了とした。

7) 実験1の結果および考察

IAT効果量 D を従属変数とした理論的中央値ゼロとの1サンプル t 検定が行われた。分析の結果、 $D(M = .19, SD = .68)$ はゼロよりも有意に高い値を示した($t(123) = 3.14, p = .002, d = .40, 95\% CI [.07, .31]$)。つまり、空間的距離の次元において「近いーポジティブ」、「遠いーネガティブ」といった距離・感情価一致効果が観測された。

実験1では距離・感情価一致効果に関する最初のエビデンスが空間的距離の次元において確認された。具体的には、参加者は概してニュートラルな潜在的態度(i.e., ポジティブ・ネガティブ表象のどちらも、近いとも遠いとも言えない)および距離・感情価の連合に不一致な潜在的態度(i.e., ポジティブ表象が遠く、ネガティブ表象が近い)を保有しておらず、むしろポジティブ表象が近く、ネガティブ表象が遠いという距離・感情価の連合に一致した潜在的態度を保有していた。

実験1で観測された距離・感情価一致効果が、現在の気分によって影響を受けている可能性は考えられよう。そこで、実験2では心理的距離のうち時間的距離の次元において実験1と同様の距離・感情価一致効果が観測・再現されるかどうか検証しつつ、IAT効果量 D と現在の気分との相関関係を検証する。

(2) 実験2 時間的距離

1) 実験参加者

短大生 110名(全て女性)、平均年齢は18.16歳($SD = .37$)であった。回答に不備のあった2名を分析から除外した(IAT課題において、カテゴリを1回目と逆転させた2回目の組み合わせ課題において、1回目のルールをそのまま適用していた。課題のルールを正しく理解していなかった可能性を否定できないため、正確な潜在的態度が測定できないと判断した)。

解釈水準理論や接近回避動機研究の領域は、性差と従属変数との間に重要な連関関係を仮定していないため、距離・感情価一致効果の観測においても片方のジェンダーのみの参加者で十分な検討を行うことができると考えられる。

2) デザイン

紙筆版IATを用いたため、IAT効果量 D の算出に関してはまずブロック3、4、6、7の正解数を算出した。エラー反応の扱いについては、参加者自身が訂正し正しい回答をした試行を除き、1つのエラーに対して1点減点とした。次にブロック3と6、4と7の正解数のプールされた標準偏差をそれぞれ算出した。距離・感情価一致効果への偏向が正の値となるよう、ブロック3の正解数からブロック6の正解数、ブロック4の正解数からブロック7の正解数をそれぞれ減算し、各ペアのプールされた標準偏差でそれぞれ除した。最後に2数の平均値を算出し、紙筆版IATの効果量 D とした。計算方法の点を除き、実験1と同様であった。

3) 実験材料および刺激

Bar-Anan et al. (2006)²⁾で用いられた時間的距離を表す単語6語を用いた。近さを表す単語は「現在・一分・一秒」、遠さを表す単語は「去年・一年・昔」であった。感情価を表す単語は、時間的距離を表す単語の数を揃えるため、ポジティブな感情価を表す単語は「快晴・達成・幸運」、ネガティブな感情価を表す単語は「自殺・殺人・差別」の6語とした。

実験の詳細について知らされていない予備調査参加者10名が、時間的距離を表す単語の感情価を「1. 非常にネガティブ」～「7. 非常にポジティブ」の7件法によって評定した。繰り返しのある t 検定の結果、時間的距離の単語は近い距離の3語($M = 3.93, SD = .38$)、遠い距離の3語($M = 3.90, SD = .42$)の間には感情価に差が見ら

れなかった($t(9) = .18, p = .86, d = .08, 95\% \text{ CI} [-.39, .46]$)。また、カテゴリ毎に語の長さの平均値を算出した。繰り返しのない一元配列分散分析の結果、4つのカテゴリ間における語の長さには差は見られなかった($F(3, 8) = 1.00, p = .44, \eta^2 = .27$)。ペアごとの平均差の95% CIは全てゼロを含み、下限 = $-1.15 \sim -.49$ 、上限 = $.49 \sim 1.15$ であった。

4)紙筆版 IAT

IATは紙筆版によって実行した。A4サイズの用紙に刺激語を11ポイント、カテゴリ名を20ポイント、教示文を12ポイントで印字した。刺激語は1ブロックあたり24語、回答時間は1ブロックあたり20秒とした。刺激語を左右に分類する際、参加者は刺激語の両脇にあるどちらかのカッコへと1つ丸をつける方法で回答した。

5)ブロック編成

試行数、距離を表す刺激語の属性、および回答が記入式である点を除いて実験1と同様であった。

6)手続き

実験は心理学系の授業内で、集団で行われた。実験への参加は任意であること、授業評価点への加点となることが予め伝えられた。参加者は性別、年齢を問うフェイスシート、現在の気分(「1. ゆううつ」～「7. 楽しい」)を問う質問、紙筆版 IAT の順で課題を行った。参加者の回答がすべて終わった後、実験者がデブリーフィングを行い、実験終了とした。

7)実験2の結果および考察

IAT効果量 D を従属変数とした理論的中央値ゼロとの1サンプル t 検定が行われた。分析の結果、 $D(M = 1.43, SD = .79)$ はゼロよりも有意に高い値を示した($t(107) = 18.71, p < .0001, d = 2.56, 95\% \text{ CI} [1.28, 1.58]$)。つまり、時間的距離の次元においても「近い—ポジティブ」、「遠い—ネガティブ」といった距離・感情価一致効果が観測された。なお、 D と現在の気分($M = 4.33, SD = 1.53; r = .10, p = .30$)との間には有意な相関が見られなかった。

実験2では距離・感情価一致効果に関する2つ目のエビデンスが時間的距離の次元において確認された。この結果は心理的距離の各次元が連動しているため、異なる次元の距離においても同様の結果が再現されたことを示唆し

ている。さらに、感情価が課題の重要な構成要素であるため、従属変数が参加者の気分によって変動する可能性があった。しかしながら、実験2では現在の気分と D との間に相関関係が見られなかった。このことは、現在の気分に左右されることなく、むしろ日常生活で過学習された経験の蓄積が、距離・感情価一致効果に関する潜在的態度を反映していることを示唆している。

実験3では心理的距離のうち社会的距離の次元において実験1～2と同様の距離・感情価一致効果が観測・再現されるかどうか検証する。

(3) 実験3 社会的距離

1)実験参加者

短大生106名(全て女性)、平均年齢は18.14歳($SD = .35$)であった。回答に不備のあった7名を分析から除外した。そのうち、実験2と同様の基準で除外された参加者は1名、IAT課題の回答に欠損値があるため除外された参加者が6名であった。

2)デザイン

実験2と同様であった。

3)実験材料および刺激

Bar-Anan et al. (2006)²⁾ で用いられた社会的距離を表す単語6語を用いた。近さを表す単語は「友人・両親・兄弟」、遠さを表す単語は「他人・対戦者・匿名」であった。なお、「兄弟」は“siblings”を訳した語である。参加者が女性のみであるため「姉妹」はよりポジティブに解釈される可能性を否定できず、平仮名表記で「きょうだい」とすると文字数が比較的多くなるため、ここでは「兄弟」の語を選択した。また「匿名」について、“anonymous person”をそのまま用いれば訳語は「匿名者」となるが、本研究では2文字で納まる「匿名」の語を選択した。感情価を表す単語は実験2と同様であった。

実験の詳細について知らされていない予備調査参加者22名が、社会的距離を表す単語の感情価を「1. 非常にネガティブ」～「7. 非常にポジティブ」の7件法によって評定した。繰り返しのある t 検定の結果、社会的距離の単語は近い距離の3語($M = 5.86, SD = .66$)、遠い距離の3語($M = 2.82, SD = 1.26$)の間の感情価に有意な差が見られた($t(21) = 11.53, p < .0001, d = 3.02, 95\% \text{ CI} [2.49, 3.58]$)。そのため、実験3では参加者に社会的距離を表す語の感情価の強さを問い、従属変数と相関が見

られるかどうか検討する。また、カテゴリ毎に語の長さの平均値を算出した。繰り返しのない一元配列分散分析の結果、4つのカテゴリ間における語の長さには差は見られなかった($F(3, 8) = 1.00, p = .44, \eta^2 = .27$)。ペアごとの平均差の95% CIは全てゼロを含み、下限 = $-1.15 \sim -0.49$ 、上限 = $.49 \sim 1.15$ であった。

4)紙筆版 IAT

実験2と同様であった。

5)ブロック編成

距離を表す刺激語の属性を除いて実験2と同様であった。

6)手続き

社会的距離を表す6語の感情価(「1. 非常にネガティブ」～「7. 非常にポジティブ」)を問う質問をIAT課題の後に行った点以外は実験2と同様であった。

7)実験3の結果および考察

IAT効果量 D を従属変数とした理論的中央値ゼロとの1サンプル t 検定が行われた。分析の結果、 D ($M = 1.39, SD = .85$)はゼロよりも有意に高い値を示した($t(98) = 16.27, p < .0001, d = 2.31, 95\% CI [1.22, 1.56]$)。つまり、社会的距離の次元においても「近い—ポジティブ」、
「遠い—ネガティブ」といった距離・感情価一致効果が観測された。

予備調査において、社会的な近さを表す語と遠さを表す語との間で感情価の強さに有意差が見られたため、本実験においても同様に感情価の測定を行った。繰り返しのある t 検定の結果、予備調査と同様に社会的距離の近い距離の3語($M = 5.95, SD = .98$)と遠い距離の3語($M = 2.88, SD = 1.11$)との間の感情価に有意な差が見られた($t(98) = 20.01, p < .0001, d = 2.93, 95\% CI [2.76, 3.37]$)。しかしながら、 D と社会的距離の近い語の感情価($r = -.14, p = .16$)および社会的距離の遠い語の感情価($r = -.03, p = .77$)の間には有意な相関が見られなかった。試みに、社会的距離の近い語の感情価と遠い語の感情価の数値を乗算することで、2変数の交互作用を示す変数($M = 17.08, SD = 7.10$)を生成し、 D との相関分析を行った。しかしながら、有意な相関は見られなかった($r = -.08, p = .43$)。同様に、 D と現在の気分($M = 3.84, SD = 1.29; r = -.08, p = .46$)との間にも有意な相

関が見られなかった。

実験3では距離・感情価一致効果に関する3つ目のエビデンスが社会的距離の次元において確認された。実験2と同様、心理的距離の各次元の連動、および結果の再現性を確認することができた。また、実験3においても、従属変数が参加者の気分によって変動する可能性を検証した。しかしながら、実験2と同様、現在の気分と D との間に相関関係が見られなかった。この結果は距離・感情価の潜在的態度に対しては、現在の気分ではなく、日常生活における過学習によって蓄積された経験の影響力をその背景に想定する、さらなる根拠づけとなると考えられる。さらに、社会的距離の近い語と遠い語の感情価の評価がそれぞれ距離・感情価の潜在的態度へ影響する可能性を検証したが、相関関係は見られなかった。社会的距離は他の3つの心理的距離の次元と比較して、それ自体が感情的評価をより強く反映(e.g., 親しい—快、親しくない—不快、のように、感情価が随伴)した概念であると捉えられる。しかしながら実験3の結果からは、刺激に対する個々の評価(i.e., 顕在的な反応)は、潜在的態度との間の連関関係が見いだされるほどの強力な効果量を持つ要因とは解釈することができない。事実、実験1～2の刺激語においては、近い語と遠い語の間の感情価の強さに有意差は見られなかった。むしろ、距離・感情価一致効果を規定する、刺激の感情価以外の要因の存在を示唆していると解釈できよう。

実験4では心理的距離のうち仮想性距離の次元において実験1～3と同様の距離・感情価一致効果が観測・再現されるかどうか検証する。

(4) 実験4 仮想性距離

1)実験参加者

大学生172名(うち女性15名、記入漏れ1名)、平均年齢は20.60歳($SD = 1.16$)であった。参加者の男女比に偏りがあるが、実験2に記した理由で検証に影響はないと判断した。回答に不備のあった19名を分析から除外した。そのうち、実験2と同様の基準で除外された参加者は17名、現在の気分の回答、もしくは性別の回答に欠損値があるため除外された参加者が各1名であった。

2)デザイン

実験2～3と同様であった。

3) 実験材料および刺激

Bar-Anan et al. (2006) ²⁾ で用いられた仮想性距離を表す単語 6 語を用いた。近さを表す単語は「实在・実際・史実」、遠さを表す単語は「架空・空想・幻想」であった。感情価を表す単語は実験 2~3 と同様であった。つまり、実験 4 の刺激語は全て二字熟語であった。

実験の詳細について知らされていない予備調査参加者 10 名が、仮想性距離を表す単語の感情価を「1. 非常にネガティブ」～「7. 非常にポジティブ」の 7 件法によって評定した。繰り返しのある *t* 検定の結果、仮想性距離の単語は近い距離の 3 語 ($M = 4.10, SD = .32$)、遠い距離の 3 語 ($M = 3.93, SD = .41$) の間の感情価に有意な差は見られなかった ($t(9) = 1.25, p = .24, d = .19, 95\% CI [-.14, .47]$)。

4) 紙筆版 IAT

実験 2~3 と同様であった。

5) ブロック編成

距離を表す刺激語の属性を除いて実験 2~3 と同様であった。

6) 手続き

実験 2 と同様であった。

7) 実験 4 の結果および考察

IAT 効果量 D を従属変数とした理論的中央値ゼロとの 1 サンプル *t* 検定が行われた。分析の結果、 D ($M = 1.13, SD = .85$) はゼロよりも有意に高い値を示した ($t(152) = 16.37, p < .0001, d = 1.88, 95\% CI [.99, 1.27]$)。つまり、仮想性距離の次元においても「近いーポジティブ」、「遠いーネガティブ」といった距離・感情価一致効果が観測された。なお、 D と現在の気分 ($M = 3.49, SD = 1.54; r = -.02, p = .78$) との間には有意な相関が見られなかった。

実験 4 では距離・感情価一致効果に関する 4 つ目のエビデンスが仮想性距離の次元において確認された。実験 2~3 と同様、結果の再現性を確認することができた。これは距離・感情価一致効果が頑健な現象であると解釈できよう。また、実験 4 においても、従属変数が参加者の気分によって変動する可能性を検証した。しかしながら、実験 2~3 と同様、現在の気分と D との間には相関関係が見られなかった。この結果は日常生活における過学習によって蓄

積された経験が、頑健に距離・感情価に関する潜在的態度へと影響している可能性をさらに支持する知見であるといえよう。

3. 総合考察

本研究の目的は、心理的距離と刺激の感情価との連関関係を示し、心理的距離の 4 つの次元において距離・感情価一致効果を観測・再現することであった。その結果、4 つの実験において距離・感情価一致効果が観測され、実験 1 で得られたパターンは実験 2~4 において再現された。つまり、参加者は一貫して「近いーポジティブ」、「遠いーネガティブ」といった潜在的態度を保有しており、本研究の仮説は支持された。全ての心理的距離の次元において同一のパターンが再現された点は、距離・感情価一致効果がいかに頑健な現象であるかを示唆している。また、距離・感情価一致効果は現在の気分(実験 2~4)や社会的距離における刺激語の感情価の評定(実験 3)からの影響は見られなかった。このことは、顕在指標は一般的に熟考のもとに反応が遂行されるため、そのような熟考を必要としない反応を反映する潜在指標とは必ずしも連動しないためと考えられる。

本研究の結果は接近回避動機研究の領域からの予測と一致する。つまり、ポジティブな刺激には接近動機が働き、その接近行動へと随伴する心理的距離の近さが過学習された結果、自動化された連合の形成に至ると考えられる。一方、ネガティブな刺激には回避動機が働き、その回避行動へと随伴する心理的距離の遠さが過学習された結果、同様に自動化された連合の形成に至ると考えられる。距離・感情価一致効果もこの背景を基盤として観測されたと考えられる。

接近回避動機研究の領域からは、接近回避行動と感情価との連合が示されていた。一方、本研究は接近回避行動へと随伴する心理的距離と感情価との連合を見出した点で、知見の拡大が達成されたといえよう。この点では、解釈水準理論の領域に対しても一石を投じうると考えられる。具体的には、刺激の感情価をほとんど取り扱うことのない解釈水準理論の現状にあって、本研究の知見は心理的距離と刺激の感情価との連関関係を示した新しい知見である。さらに実験 3 の結果が示すように、例え顕在レベルで心理的距離を表す刺激語の感情価に差が見られたとしても、その刺激語の感情価は距離・感情価一致効果に関わる潜在的態度には影響していなかった。この結果は心理的距離と感情価との連合が熟考を必要としない自動化された処理に

よって生起するという視点をさらに支持するものである。それに加えて、心理的距離の次元が何であれ感情価との一貫した連合が観測されることは、特定の刺激語の影響よりもむしろ、「心理的接近—ポジティブ」、「心理的遠隔—ネガティブ」といったカテゴリ(i.e., 概念)間の連合によることであると考えられる。

Bar-Anan et al. (2006)²⁾では、顕在指標によっても心理的距離を表す刺激語に関して抽象度の評定が行われている。その結果、4つの心理的距離の次元では一貫して近さを表す語はより具体的、遠さを表す語はより抽象的であると評定されている。しかしながら、抽象度の異なる刺激語(e.g., 「抽象的」、「具体的」)に関する心理的距離の評定を行ったところ、有意な差が見られていない。一般的に顕在指標と潜在指標との違いは、前者が熟考もしくは自己呈示が介在するのに対し、後者はそういった意図的なプロセスを含まない。Bar-Anan et al. (2006)²⁾での顕在指標による結果が一貫していない理由、および本研究の実験3で社会的距離における(顕在指標での)感情価の評定がIAT効果量 D と相関がなかった理由は、意図的なプロセスの介在であろう。我々の日常生活では、感情価を持つ個々の刺激に対して社会的状況を考慮に入れつつ接近もしくは回避行動が生起する。そのような個々の状況を見ると、ポジティブな刺激から遠ざかる必要がある状況、ネガティブな刺激へと接近する必要がある状況は、我々が確実に遭遇しているものである。そこで、我々はそういった葛藤とも捉えられる状況では熟考もしくは自己呈示の必要に迫られ、接近動機の働くポジティブな刺激に対しても回避行動を取ったり、回避動機の働くネガティブな刺激に対しても接近行動を取ったりすることもある。一方、本研究で用いた潜在指標、つまり IAT による測定はそういった熟考もしくは自己呈示の必要がない反応を求めるものである。したがって、本研究では熟考もしくは自己呈示の制限を回避し、距離・感情価一致効果に関する潜在的態度を効率的に観測したといえよう。

解釈水準理論や接近回避動機研究の領域に与える理論的影響をより強めるためには、本研究に続いてさらなる発展的な検証が必要となろう。具体的には、心理的距離と刺激の感情価との潜在的連合が生じる背景的側面について明らかにすることである。解釈水準理論(レビューとして、Trope & Liberman, 2010)¹²⁾によると、心理的距離と表象の抽象度が双方向的に因果関係を形成している。心理的に近い表象は具体的に処理され、遠い表象は抽象的に処理される。逆に具体的な表象は近いと感じられ、抽象的な表象

は遠いと感じられる。本研究に関連づけて捉えると、心理的距離と感情価との連合は、表象の抽象度によって媒介されている可能性が考えられる。そこで、以下のような予測が成立する。まず、闘争・逃走反応の観点からは、個体にとって曖昧に表象されうる刺激(e.g., 見知らぬ動物・食物・場所、等)は相対的に危険と解釈されやすいであろう。一方、個体にとって具体的に表象されうる刺激(e.g., 馴染みのある動物・食物・場所、等)は相対的に安全と解釈されやすいであろう。また、危険な刺激に対しては回避動機が働きやすいため心理的距離を取る行動が生起し、相対的に刺激は曖昧に表象されるであろう。一方、安全な刺激に対しては接近動機が働きやすいため心理的距離を縮める行動が生起し、相対的に刺激は具体的に表象されるであろう。これに加えて、上記の予測をさらに確認するために、接近行動と心理的距離の近さ、および回避行動と心理的距離の遠さとの自動化された連合をも観測することが挙げられよう。今後はこれらの点を検証することによって、さらに解釈水準理論や接近回避動機研究の理論的發展へと貢献しうるのである。

解釈水準理論の発展と並行して、感情制御研究の領域では、自己と刺激との心理的距離を拡大することで、ネガティブな感情反応性を抑制する Distancing の効果が検証されている(e.g., Bruelmann-Senecal & Ayduk, 2015; Rude, Mazzetti, Pal, & Stauble, 2011; Williams & Bargh, 2008; Yanagisawa, Masui, Furutani, Nomura, Yoshida, & Ura, 2011)¹⁵⁻¹⁸⁾。Distancing に関する方略の効果は顕在的な刺激の呈示および顕在的な反応によって検証されている。換言すれば、これらの研究は顕在指標のみによる検証によって心理的距離と感情価を持つ刺激や感情反応性との連関関係を検討している。本研究では、潜在指標によっても心理的距離と感情価との連関関係を観察した点で、こうした感情制御研究の領域においても新たな知見を提供しうるものである。

本研究での限界点を述べたい。現在の気分の測定に際しては、1項目のみによる測定を行っており、その安定性についてはさらに検討する必要がある。また、実験3において社会的距離が近い語と遠い語の間に感情価の強さの差が見られたが、潜在的態度に影響はなかったとはいえ、距離・感情価一致効果が相対的に生じやすい環境で実験3が行われた可能性は完全には否定できない。感情価の強さに差がない社会的距離の刺激語を選定しうるかどうかは今後の検討事項としたい。

以上のように、本研究では距離・感情価一致効果を観測

し、その結果の再現性や現象の頑健性を示した。前述の通り、今後は心理的距離と刺激の感情価との潜在的連合が生じる背景的側面について明らかにすることが望まれる。

引用文献

- 1) Bar-Anan, Y., Liberman, N., Trope, Y., & Algom, D. Automatic processing of psychological distance: Evidence from a Stroop task. *Journal of Experimental Psychology: General*, *136*, 610–622. (2007)
- 2) Bar-Anan, Y., Liberman, N., & Trope, Y. The association between psychological distance and construal level: Evidence from an Implicit Association Test. *Journal of Experimental Psychology: General*, *135*, 609–622. (2006)
- 3) Stephan, E., Liberman, N., & Trope, Y. Politeness and social distance: A construal level perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, *98*, 268–280. (2010)
- 4) Wakslak, C. J., & Trope, Y. The who, where, and when of low and high probability events: Probability as distance and everyday decisionmaking. Unpublished manuscript, New York University. (2008)
- 5) Wakslak, C. J., & Trope, Y. The effect of construal-level on subjective probability estimates. *Psychological Science*, *20*, 52–58. (2009)
- 6) Cacioppo, J. T., Priester, J. R., & Berntson, G. G. Rudimentary determinants of attitudes. II: Arm flexion and extension have differential effect on attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 5–17. (1993)
- 7) Chen, M., & Bargh, J. A. Consequences of automatic evaluation: Immediate behavioral predispositions to approach or avoid the stimulus. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *25*, 215–224. (1999)
- 8) Förster, J., & Strack, F. Motor actions in retrieval of valenced information: A motor congruence effect. *Perceptual and Motor Skills*, *85*, 1419–1427. (1997)
- 9) Förster, J., & Strack, F. Motor actions in retrieval of valenced information: II. Boundary conditions for motor congruence effects. *Perceptual and Motor Skills*, *86*, 1423–1426. (1998)
- 10) Kawakami, K., Phillips, C. E., Steele, J. R., & Dovidio, J. F. (Close) distance makes the heart grow fonder: The impact of approach orientations on attitudes toward Blacks. *Journal of Personality and Social Psychology*, *92*, 957–971. (2007)
- 11) Phillips, C. E., Kawakami, K., Tabi, E., Nadolny, D., & Inzlicht, M. Mind the Gap: Increasing associations between the self and blacks with approach behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, *100*, 197–210. (2011)
- 12) Trope, Y., & Liberman, N. Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review*, *117*, 440–463. (2010)
- 13) Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 197–216. (2003)
- 14) 五島史子・太田信夫. 漢字二字熟語における感情価の評価 筑波大学心理学研究, *23*, 45-52. (2001)
- 15) Bruehlman-Senecal, E., & Ayduk, O. This too shall pass: Temporal distance and the regulation of emotional distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, *108*, 356–375. (2015)
- 16) Rude, S. S., Mazzetti, F. A., Pal, H., & Stauble, M. R. Social rejection: How best to think about it? *Cognitive Therapy and Research*, *35*, 209–216. (2011)
- 17) Williams, L. E., & Bargh, J. A. Keeping one's distance: The influence of spatial distance cues on affect and evaluation. *Psychological Science*, *19*, 302–308. (2008)
- 18) Yanagisawa, K., Masui, K., Furutani, K., Nomura, M., Yoshida, H., & Ura, M. Temporal distance insulates against immediate social pain: An fNIRS study of social exclusion. *Social Neuroscience*, *6*, 377–387. (2011)